

[研究ノート]

ロシア帝国の公共図書館

——「大改革」後ロシア社会における読者層拡大の検証——

巽 由樹子

はじめに

アレクサンドル二世治下（1855–1881）で行われた「大改革」以降、ロシア社会には様々な変化が生じたが、その一つとして、社会の流動化を挙げることができる。農奴身分が廃止され、出稼ぎ者の増大による都市、農村間の移動が活発化する一方、新興資本家層が成長し、また、身分制原理を脱却した教育制度改革によってエリート集団の構成が変化するなど、社会構造は大きく変わりつつあった。ミリュコフが『ロシア文化史概説』で評したように、「大改革」期は新たな社会集団形成が開始された時代であったと言える⁽¹⁾。

社会の流動化と新たな集団形成の現象は、出版メディアの読者の構造にも影響を及ぼした。この時期、急変する社会状況に適応するため、多くの人々が情報を求めて読書をするようになったとされる⁽²⁾。一方、政府は開明官僚の主導のもとグラスノスチの方針を採り、定期刊行物新規創刊の制限や検閲制度を緩和した⁽³⁾。下からの需要増大と上からの規制緩和を受けてロシアの出版事業は急速に発達し、定期刊行物を中心に、書物が本格的に普及するに至った。それは、単に出版物の発行量が増えたということではない。文学作品の廉価版が発行され、また改革前までは官製誌と、インテリゲンツィヤ向けの教養的な「厚い雑誌（толстые журналы）」しかなかった定期刊行物には、西欧に倣った民間新聞及び絵入り雑誌が新しく現れるなど、新しいタイプの出版メディアが登場したのである。

こうしたメディア環境の変動は、情報の受け手をも変化させた。新しく普及した民間定期刊行物のうち、新聞を分析したマクレイノルズは、大量頒布型のメディアの普及によって情報保有者の範囲が拡大し、教養エリートは従来の発信スタイルを変え、ジャーナリストのホームグラウンドに上らざるをえなくなったと指摘している⁽⁴⁾。すなわち旧来の特権的教養層

1 Миллюков П. Очерки по истории русской культуры. Ч. 1. Население, экономический, государственный и сословный строй. СПб., 1898. С. 192.

2 Рейтблат А.И. От Бовы к Бальмонту: Очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века. М., 1991. С. 13, 19.

3 William B. Lincoln, "The Problem of *Glasnost*' in Mid-Nineteenth Century Russian Politics," *European Studies Review* 11 (1981), pp. 171–188; Daniel Balmuth, "Origins of the Russian Press Reform of 1865," *The Slavonic and East European Review* 47 (1969), pp. 369–388; Charles A. Ruud, *Fighting Words: Imperial Censorship and the Russian Press, 1804–1906* (Toronto: University of Toronto Press, 1982).

4 Louise McReynolds, "Imperial Russia's Newspaper Reporters: Profile of a Society in Transition, 1865–1914," *The Slavonic and East European Review* 68, no. 2 (1990), p. 277.

が専ら情報を受け、発信する時代は過ぎ、はるかに広範囲な社会階層の人々が情報を摂取できる環境が整ったのであった。

しかしマクレイノルズは、読者層を厳密には推定できないとして、主に記事内容を分析する手法を取り、読者集団の構成の詳しい検討はしなかった⁽⁵⁾。だが、読者研究が不可能であるわけではない。改革期以降の読者については、すでにブルックスが、ナロード向けの木版出版物であるルポークで展開されるサクセス・ストーリーのパターンを分析し、その読者である農民、労働者のメンタリティを明らかにしている⁽⁶⁾。また高田は、都市と農村を出稼ぎのために移動する農民、労働者のリテラシー、読書行動を検討することによって、19世紀後半ロシア農村の文化的変容を論じた⁽⁷⁾。ただしこれらはいずれも、労働者、農民という社会下層出身の読者集団に対象を限るものであり、改革期以降に普及した都市の大量頒布型出版メディアの読者はとりあげられていない。

都市の出版メディアの読者については、従来、文化的に未成熟で主体性に欠ける人々であるとの評価が、いくつかの先行研究の中で見られた⁽⁸⁾。しかしこれらは、読者層の全体的な構成を示すことはなかった。こうした中で、包括的な読者構成を明らかにしたのがレイトブラトである。彼は19世紀後半ロシアの読者を、高等教育あるいはギムナジア教育を受けてエリート読者を形成した「教養読者」、知識を増やすため、あるいは娯楽のために読書した「半教養読者」、独学あるいはゼムストヴォ学校、教会学校で学んだ「農村読者」の三者に分類した。そして、教養読者には厚い雑誌や専門雑誌、半教養読者には絵入り雑誌や通俗小説、農村読者にはルポークや宗教本が対応するメディアであったと図式化し、改革後ロシア社会における出版メディアと読者の階層構造を明らかにした⁽⁹⁾。レイトブラト自身が読者に関する研究が少ないと指摘したように、この研究以前に19世紀後半の読者構成について包括的な像を示したものはなく、また以後も、読者研究はそれほど進展していない。

だがレイトブラトが提示した見取り図は、きわめて示唆に富むが問題がないわけではない。彼は上記の三種の読者集団について、それぞれに対応する人々の具体的な属性を、教養読者は学者・文学者、学生、ゼムストヴォ勤務者をはじめとする地方インテリゲンツィヤ、半教養読者は中下級官僚、商人、町人、下級事務職員、商店の番頭、仕立て屋、召使、労働者などというように挙げている。しかしこうした区分はあくまで静的に示され、19世紀後半において具体的にどのような時系列的变化をたどって読者層が拡大したのかについての、実証的な分析が不十分となっている。また、厚い雑誌、絵入り雑誌、新聞、ルポークという各種

5 Louise McReynolds, *The News under Russia's Old Regime* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1991), p. 9.

6 Jeffrey Brooks, *When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861–1917* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1985).

7 高田和夫『近代ロシア社会史研究：「科学と文化」の時代における労働者』山川出版社、2004年；同『近代ロシア農民文化史研究』岩波書店、2007年。

8 Рубакин Н.А. Этюды о русской читающей публике – факты, цифры и наблюдения // Рубакин Н.А. Избранное. Т. 1. М., 1975. С. 76, 82; Шафур Я. Очерки психологии читателя. М.-Л., 1927. С. 29–32. など。

9 Рейтблат. От Бовы к Бальмонту; Книга и читатель 1900–1917: Воспоминания и дневники современников / Сост. А.И. Рейтблат. М., 1999. С. 4.

の活字メディアの読者層を、個々の社会階層とやや単純に対応させすぎているという問題も指摘できる。この結果、複数のメディアを併用した読者の像がわかりにくくなっている。

本稿は、読者の拡大の時系列的推移と読書傾向の分析を深化させ、改革期以降の読者層拡大と再編の過程を具体的に明らかにすることを目的とする。そのために対象としてとりあげるのが、当時の公共図書館である。なぜなら公共図書館は、出版メディアの読者の構造におけるこうした変化を、書籍の提供によって技術的に支えると同時に、観察者として記録した機関だからである。

ロシアの公共図書館については既に帝政末期に、H.A. ルバーキンを筆頭に、識字普及のための校外教育運動に携わった人々が著作を残し、その中から、革命思想普及の方策を探るレーニンの労働者読者の研究も現れた⁽¹⁰⁾。革命後はこれを規範としてプロパガンダ施設としての図書館の研究が多くなされたが、K.I. アブラーモフの諸研究は、そうした枠組みを超えた包括的なものとして重要である⁽¹¹⁾。ソ連崩壊後の90年代以降はイデオロギー的制約がとりはられ、M.IO. マトヴェーエフらが多数の詳細な研究を著しているが、あくまで図書館史の枠内に留まり、同時代の社会との関係にはあまり関心が払われていない⁽¹²⁾。

10 *Рубакин*. Этюды о русской читающей публике. С. 35–101; *Дерунов К.Н.* Избранное: Труды по библиотековедению и библиографии. М., 1972; *Хавкина Л.Б.* Библиотеки, их организация и техника: Руководство по библиотековедению. СПб., 1911; *Абрамов Я.В.* Хроника народных библиотек // Русская школа. 1893–1906; *Геннади Г.Н.* Указатель библиотек в России. СПб., 1864; *Ленин В.И.* Попытное направление в русской социал-демократии // *Ленин В.И.* Полное собрание сочинений. Изд. 5-е. М., 1959. Т. 4. С. 240–273.

11 *Абрамов К.И., Васильченко В.Е.* История библиотечного дела в СССР (до 1917 года). М., 1959; *Абрамов К.И.* Из истории развития библиотечного дела в России в 30-х – начале 60-х годов XIX века: Автореф. дисс. ... канд. педагог. наук. М., 1953; *Абрамов К.И.* История библиотечного дела в СССР. М., 1980 など。1970年代以降は地域史と結びついた図書館研究が増加した。たとえば *Полищук Ф.М.* История библиотечного дела в дореволюционном Иркутске (конец XVIII в. – февр. 1917 г.). Иркутск, 1983; *Роцевская Л.П.* Библиотеки Яренского уезда Вологодской губернии в XIX – начале XX в. // История библиотек. Вып. 4. СПб., 2002. С. 9–29 など。

12 *Матвеев М.Ю.* Общественные библиотеки России и их читатель: вторая половина XIX – начало XX в.: Дисс. ... канд. педагог. наук. СПб., 1998; *Матвеев М.Ю.* Земские народные библиотеки в дореволюционной России: становление и развитие // История библиотек. Вып. 3. СПб., 2000. С. 9–27; *Ялышева В.В.* Изучение читателей общественными библиотеками российской провинции (1880-е гг. – 1911 г.). Дисс. ... канд. педагог. наук. СПб., 2001. 他に、*Ванеев А.Н.* Развитие библиотековедческой мысли в России в начале XX века. СПб., 1999; *Афанасьев М.Д.* Место библиотеки в культурной жизни провинции (XIX в.) // Российская провинция XVIII–XX веков: реалии культурной жизни. Кн. 2. Пенза, 1996. С. 3–8; *Голубцова И.А.* Народные библиотеки дореволюционной России: история создания и развития: Автореф. дисс. ... канд. педагог. наук. СПб., 2000 など。最近ではカムスコヴァが、無料図書館建設を推進したのは市民社会の平等思想であると論じたが、ソ連期の議論を市民社会論の用語に置き換えたものとの印象を受ける。*Камскова Т.А.* Народные библиотеки как явление культуры (на примере Оренбургской губернии второй половины XIX – начала XX вв.): Автореф. дисс. ... канд. педагог. наук. Самара, 2003. アメリカではスチュアートが、図書館建設を推進した地方インテリゲンツィヤを近代社会を構成する専門職集団の一つとしてとりあげた。Mary Stuart, “The Ennobling Illusion”: The Public Library Movement in Late Imperial Russia,” *The Slavonic and East European Review* 76, no. 3 (1998). 日本では高田が農民啓蒙運動の一分野として農村無料図書館をとりあげた。高田和夫「ロシア農民とリテラシイ」『法政研究』(九州大学法政学会) 62巻1号、1995年。

本稿ではまず第一章で、これらの先行研究が明らかにしてきたロシア公共図書館の普及過程と地理的分布を概観する。20世紀初頭の書誌学者リソフスキーが言うように、この時期、書物の流通機構は書店と公共図書館のみであり⁽¹³⁾、したがって公共図書館の普及過程は、ロシア社会における書物の流通環境が整備される過程を反映している。またその地理的分布は、地域ごとの相違、あるいは都市と農村との間の差違と共に、多民族を擁したロシア帝国においてロシア語出版物の読書空間がいかなる位置を占めたかを知らせてくれる。

その上で第二、第三章において、公共図書館が残した年次報告書等を史料に、次のような分析を行う。第一に、公共図書館が成立した1830年代から日常レベルに普及する1890年代までの記録を追うことで、改革期以降の読者の身分階層の変遷を、前史も含めて時系列的に明らかにする。第二に、報告書類に記録された利用者の読書傾向の分類に着目することでレイトブラトとは異なる読者の分類をし、個々のメディアを併用する読者も含めた読者集団の形成過程の解明と、その中で特に19世紀後半に現れた読者の具体像の提示を試みる。この作業によって改革期以降の読者層の構造の変化を明らかにし、近代ロシア社会におけるその意義を示したい。

史料としては、ロシア国立歴史文書館所蔵の、あるいは公刊された、各図書館の年次報告書、ゼムストヴォ及び内務省による統計、並びに当時の教育雑誌『ロシアの学校(Русская школа)』⁽¹⁴⁾にЯ.В. アブラーモフが連載した「人民図書館雑報」所収のデータを用いた。

1. 19世紀ロシアにおける公共図書館の普及過程と地理的分布

(1) 普及過程

18世紀以来、ロシアには複数の図書館開設計画があった⁽¹⁵⁾。しかしいずれも成功せず、19世紀初頭の時点では、学術機関の専門図書館や書店付属の貸本屋はあったものの、公共図書館はペテルブルク、モスクワ、オデッサに存在するのみであった⁽¹⁶⁾。公共図書館の本

13 Лисовский Н.М. Библиография: Обзор трудов библиографического содержания: Отт. (с доп.) из «Большой энциклопедии» т-ва «Просвещение». СПб., 1900; Леликова Н.К. Становление и развитие книговедческой и библиографической наук в России в XIX – первой трети XX века. СПб., 2004. С. 147.

14 1890年1月にЯ.Г. グレーヴィッチが発行・編集者として創刊した、学校と家族向けの月刊の総合教育雑誌。1897年の第3号よりЯ.В. アブラーモフが、全国各地の新聞・雑誌や図書館運営団体の報告書などから全国の無料図書館のデータを収集、紹介する「人民図書館雑報(Хроника народных библиотек)」を連載した。

15 1714年、Ф.С. サルトウイコフによるピョートル一世宛での公共図書館設立の提案に始まり、ノヴゴロド(1770年代)、トゥーラ(1779年)、カールガ(1794年)で散発的に試みられたが成功しなかった。Матвеев М.Ю. Возникновение публичных (общественных) библиотек в губерньских городах // XXIX научная конференция молодых специалистов: материалы. СПб., 1994. С. 66–67.

16 ペテルブルクには帝室公共図書館、モスクワにはルミャンツェフ図書館が設置され、現在の二つの国立図書館の前身となった。オデッサでは1829年、ノヴォロシア総督М.С. ヴォロンツォーフの働きかけで市当局の資金運営による図書館が開設され、革命前ロシア最大級の公共図書館となった。Гришина З.В., Пушков В.П. Библиотеки. Накопление и использование книжных

格的普及は19世紀に入ってからであり、それは三段階から成り立っている⁽¹⁷⁾。

第一段階の発端となったのは、1830年4月23日、自由経済協会⁽¹⁸⁾会長H.C.モルドヴィノフが内務大臣A.A.ザクレフスキーに宛てた手紙で、全国的な公共図書館網の整備を建言したことであった。イギリスでの生活経験があり、ロシアの工業振興が不可欠であると主張するモルドヴィノフは、民衆啓蒙をその基盤として重視したため、早くから公共図書館開設を構想していた。彼は各県の貴族団や市当局からの資金及び利用者の利用料によって運営される図書館を、帝国内全県の県都に設置することを構想し、「この施設によって、第一に、我が国の都市では、住民の間に、世論を形づくり、互いに助言しあう心意気よみがえるでしょう。都市には今、顔を合わせて、啓蒙と産業の成功について議論する場がないのです」⁽¹⁹⁾とザクレフスキーに訴えた。

モルドヴィノフの建言を政府は受け入れ、1830年6月、内務省によって52の県都に有料公共図書館開設の指示が出された。これにより設立されたものは県公共図書館(губернская публичная библиотека)と称され、ロシアでの公共図書館建設の第一波となった。

しかし政府は啓蒙政策を採る一方で、公共図書館のコントロールに腐心した。1833年、ニコライ一世は公共図書館とその蔵書カタログの監視を内務省に命じている。そして翌34年に公共図書館の管轄がウヴァーロフ率いる国民教育省に移されると、不適切な書籍の没収、新規開館の制限が行われ、さらに35年8-9月にかけて、教育省が定めた良書一式が33の県公共図書館に送付された⁽²⁰⁾。

このように政府が神経をとがらせたものの、県公共図書館の活動はきわめて低調だった。図書館運営の役割を期待された貴族は、自身に十分な蔵書があるため公共図書館への理解が乏しく、1833年、18都市の図書館には彼らから少額の寄付があったものの、34都市では全く集まらなかった⁽²¹⁾。また、図書館開設を中央に報告したものの、書類上の存在にとどまる都市もあった⁽²²⁾。この結果、実際に図書館が開設されたのは29の県都のみであった。

利用者も少なかった。この要因としては、ロシア社会で書物の需要がそれほど高まっていなかったこと、開館後も慢性的資金不足に陥った図書館が利用者の要望に応える書籍を新規

богатств // Очерки Русской культуры XIX века. Т. 3. М., 2001. С. 513–563; Одесская городская публичная библиотека, ее основание и успехи. Одесса, 1848; *Попруженко М.Г.* Одесская городская публичная библиотека 1830–1910 г. (Исторический очерк). Одесса, 1911.

17 *Матвеев.* Возникновение публичных библиотек. С. 66.

18 1765年、自由主義的貴族によって設立された経済振興を図る団体。

19 Сборник Русского Исторического Общества. Т. II. СПб., 1868. С. 414.

20 *Абрамов К.И.* Городские публичные библиотеки России: История становления (1830 – начало 1860-х гг.). М., 2001. С. 23–32.

21 Там же. С. 34.

22 ニーヅニーノヴゴロドでは、1837年に貴族たちが図書館開設を先送りすると決定したが、教育省の報告書では既に存在することになっていたため、収集された蔵書だけギムナジアに保管された。46年になって県知事が、図書館の資産が8年間全く手つかずであることに気づき、活動を再開した。サラトフ、リャザンでも事態は同様であった。Двадцати-пятилетие Нижегородской городской библиотеки 1861–1886. Нижний Новгород, 1886. С. 2; Отчет о состоянии Саратовской городской публичной библиотеки в 1890 году. Саратов, 1891. С. 1; *Ценикова М.В.* Первая публичная библиотека в Рязани // История библиотек. Вып. 1. СПб., 1996. С. 56.

に購入できなかったこと、高額な貸出料金（ただし閲覧は無料）、下層民の利用を制限するための「きちんとした身なりの人物が図書館入館の権利を有する」⁽²³⁾との条項を含む運営規則による、県公共図書館の閉鎖性などが挙げられる。50年代に県公共図書館は利用者が減って閉鎖が相次ぎ、残ったのはわずか7館であった⁽²⁴⁾。

しかし1855年に新帝アレクサンドル二世が即位し、改革事業が開始される頃から情勢は大きく変わる。先述した通り、数々の社会制度改革と工業化、都市化の進展で急変する社会状況の下、人々は情報と新たな生活規範を求めて読書をするようになった⁽²⁵⁾。政府の改革担当者たちは、「グラスノスチ」の方針を採って積極的に戦況、国家予算などの情報の公開を行い⁽²⁶⁾、定期刊行物新規創刊の制限や検閲制度を緩和した⁽²⁷⁾。需要増大と規制緩和を受けて、ロシアの出版事業は定期刊行物発行を中心に、1850年代後半から急速に発達した。ロシア国内の定期刊行物の総数は、ニコライ一世の時代が100誌強で横這いであったのに対して1855年以降急増し、60年には倍に達した⁽²⁸⁾。

こうした社会機運のもと、読書の普及によって社会貢献を意図する私人や、各種の啓蒙的な協会（общества）が、私財によって有料公共図書館を開設する動きが広がった。これが図書館普及の第二段階、協会公共図書館（общественная библиотека）である⁽²⁹⁾。協会公共図書館は県都にとどまらず、郡都のレベルまで広がった。また、閉鎖されていた複数の県公共図書館が活動を再開した。この結果、1864年、ロシア全国の公共図書館は92館まで増加した⁽³⁰⁾。ただし1860年代末に至ると私営協会図書館は資金難に見舞われたため、多くの図書館が市会やゼムストヴォの管理下に入り、以後、市公共図書館（городская публичная библиотека）と呼ばれることになった。

政府は、新たな段階を迎えた図書館普及の動きに対しても、慎重にコントロールを加えた。まず1860年代初頭、革命派の運営する日曜学校と無料図書館が当局によって全て閉鎖された。1865年の臨時出版規則（検閲法）では図書館開設に県知事の許可が必要となり、67年には、公共図書館の管轄は教育省から内務省に移管された。さらに84年の臨時規則では警察による図書館勤務者の監督、90年の「無料大衆図書室とその監督手続きに関する規則」では無料図書館の蔵書ジャンルの制限も定めるなど、ロシア帝国の公共図書館は常に当局の統制下に置かれた⁽³¹⁾。

23 Попруженко. Одесская городская публичная библиотека. С. 11.

24 Матвеев. Возникновение публичных библиотек. С. 68. ヴャトカ県サラプーリ図書館の年間利用者は、1840年代は平均32人だったが50年代に激減し、56年にゼロとなった。出典は注53参照。

25 Рейтблат. От Бовы к Бальмонту. С. 13, 19.

26 Lincoln, “The Problem of Glasnost’,” pp. 171–188; Жирков Г.В. Век официальной цензуры // Очерки русской культуры XIX века. Т. 2. М., 2000. С. 207.

27 Balmuth, “Origins of the Russian Press Reform of 1865,” pp. 369–388.

28 Ruud, *Fighting Words*, p. 254.

29 «общественная библиотека」という語は一般名詞の「公共図書館」の意味も持つが、ここではヴァネーエフによるロシア公共図書館の類型学での用語法にしたがって、改革期以降、諸協会に設立された図書館に分類されるものの名称として用い、「協会図書館」と訳出した。Ванеев. Развитие библиотековедческой мысли. С. 21–30.

30 Рейтблат. От Бовы к Бальмонту. С. 167–168; Stuart, “‘The Ennobling Illusion’,” pp. 408–409.

31 Абрамов К.И. Из истории развития библиотечного дела. С. 11–13.

こうした制限下でも、啓蒙諸協会や社会活動家らは、社会の広範囲へ書籍を提供するために公共図書館運営を継続した⁽³²⁾。そして1880年代以降、利用者を増やすため、各地の既存公共図書館は民衆向けの平易な書籍を購入し、安い貸出料金のコースを新たに設定した⁽³³⁾。また、より効率的な書籍普及を実現するために、年次報告書等で利用者データの詳細な分析を始めた⁽³⁴⁾。

つづく図書館普及の第三段階は、農村を中心に展開される。農奴制廃止以降、ロシアでは農村の近代化も重要な社会問題であった。1860年代以降、相次いで設立されたペテルブルク、モスクワ、ハリコフ等の識字委員会や良書普及協会などの各種啓蒙団体は、農民への識字普及のために、良書の出版と廉価での販売を活動の軸としていたが、農村での図書館の設置も重要な課題として認識していた⁽³⁵⁾。1864年に設置されたゼムストヴォや在地の行政機関にとっても、農村近代化は切実な問題であり、ゼムストヴォの専門職従事者を中心とする地方インテリゲンツィヤが図書館開設の道を探った。ある郡の医師たちは、「教育が人民大衆の所有物とならないうちは、医師のいかなる努力も結実しない」と医療業務合理化を願い、農村での図書館建設に取り組んでいる⁽³⁶⁾。しかし1870-80年代にはゼムストヴォの財政状況ゆえに、学校図書館の建設が優先された⁽³⁷⁾。

ようやく1890年代に入り、単独図書館（図書室）の設置が本格化する。まずペテルブルク識字委員会（Петербургский комитет грамотности）が93年と95年の二度にわたって、各地のゼムストヴォに計34,000ルーブルを寄付したことによって、全国30のゼムストヴォに110の図書館が開設された。さらに1896年にはモスクワ識字委員会が20,000ルーブル寄付した他、各地の啓蒙的な諸協会及び住民からの寄付金が集まった。こうした資金をもとに、県及び郡ゼムストヴォ、あるいは郷及び村落共同体から予算がついたため、識字率の向上を背景に、図書館建設が全国各地での継続的現象となった。これは人民図書館（народная библиотека）と呼ばれるものであり、公共図書館普及運動は第三段階を迎えた。人民図書館は、利用料が無料である点と、都市だけでなく農村にも積極的に建設された点が従来の公共図書館と異なる。あるデータによれば1892年にわずか38館だったゼムストヴォの人民図

32 図書館運営者たちはしばしば当局による制限の撤廃を求めたが、部分的なものを除けば、制約が取り除かれることはなかった。20世紀初頭には、こうした法的規制のもとで図書館運営するためのハンドブックが発行されている。Библиотеки (общественные и народные) и книжная торговля: Систематический свод законов, распоряжений, правил, инструкций уставов справочных сведений и пр. СПб., 1905など。

33 ハリコフ図書館では1880年代より平民利用者の少なさが問題となり、90年に廉価図書館が開かれ、月20コペイカと月5コペイカの二つの割引コースが設定された。Десятилетие Харьковской Общественной библиотеки (26 сент. 1886 г. – 26 сент. 1896 г.). Харьков, 1898. С. 39.

34 Ялышева. Изучение читателей. С. 34–39.

35 Банк Б.В. Изучение читателей в России (XIX в.). М., 1969; Блюм А.В. Издательская деятельность С.-Петербургского комитета грамотности (1861–1895) // Книга: Исследования и материалы. Сб. 38. 1979. С. 99–117.

36 Русская школа. 1897. № 3. С. 217–218.

37 Голубцова. Народные библиотеки. С. 8.

書館は、98年に3,000、1904年に45,000館に及んだという⁽³⁸⁾。

以上、ロシア帝国では、70年あまりをかけて公共図書館が普及した。ただし利用者の規模は、1880年代初頭で300-400万人、人口の3-4%にとどまったこと、その増大は世紀末から20世紀初頭にかけてであったことを付言する必要がある⁽³⁹⁾。

(2) 地理的分布

公共図書館を利用したのは、近在の居住者が主である。たとえばヴァトカ県ウルジュムスク郡ウルジュムスクの人民図書館では、1896年の年間利用者1259人のうち、図書館から1-5露里⁽⁴⁰⁾の在住者が56%と最も多く、6-9露里が28%、10露里以上が6%であったし、トボリスク県ゴリシユマノフ村の人民図書館では、1897年の利用者72人中、3-5露里が4人、5-10露里が7人、10露里超が17人で、残り44人はごく近隣の住民であった⁽⁴¹⁾。したがって、一つの図書館がカバーできる地理的範囲はかなり狭いと言える。このことを念頭に、図書館普及の三段階において、読者の存在範囲が地理的にはどのように拡大したかを検証したい。

まず第一段階たる1830-40年代には、ヨーロッパ・ロシア50県中29県に、原則1県1館が開設された⁽⁴²⁾。この他にカフカス1館、シベリア2館が設置されたが、一部の県に一館程度ということは、点のようなごく限られた範囲しかカバーできなかったと考えられる。

つづいて、公共図書館建設第二段階を経た1870年の全国の図書館分布は、内務省出版総局の報告書によれば地図の通りである⁽⁴³⁾。30-40年代と異なり、協会公共図書館及び市公共図書館はヨーロッパ・ロシアのほぼ全県と、シベリアに6館、中央アジアに1館開設されている。ヨーロッパ・ロシアの一県平均は6館弱であるため、公共図書館は近在にある者のみが利用可能という程度の水準だと推定されるが、裾野は広がっている。

38 *Рейтблат*. От Бовы к Бальмонту. С. 173. ただし数値はデータによって異同がある。

39 *Мохначева М.П.* Читатели провинциальных публичных библиотек и репертуар их чтения в освещении газеты «Губернских ведомостей» (источниковедческий анализ) // *Культура российской провинции: Век XX-XXI веку: Материалы Всероссийской научно-практической конференции 23-26 мая 2000 г. Калуга, 2000.* С. 176. 1860年代末~70年代初頭の識字率は都市住民が30%超であったものの、人口の9割を占める農村住民が5-6%にとどまったため、平均値は8% (1000万人超)であった。両首都では突出して高く、ペテルブルクでは1869年59.5% (男性66.3%)、81年64.4% (男性71.8%)、モスクワでは71年45.7% (男性52.0%)、82年49.8% (男性58.0%)に及んだ。識字率は19世紀末には向上し、1896年には港湾労働者54%、日雇い労働者59%、御者84%、ソーセージ職人85%、パン屋86%、レストラン給仕90%に及んだとのデータがある。*Рейтблат*. От Бовы к Бальмонту. С. 11-12; G. Guroff, S. F. Starr, "A Note on Urban Literacy in Russia, 1890-1914," *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 19 (1971), p. 525; Brooks, *When Russia Learned to Read*, p. 13.

40 一露里は1.067km。

41 *Русская школа*. 1897, № 5-6. С. 299; № 9-10. С. 388.

42 *Абрамов К.И.* Городские публичные библиотеки России. С. 123

43 РГИА (Российский государственный исторический архив), ф. 776, оп. 4, п. 5, л. 118-126より作成。



地図 1870年の公共図書館所在県と館数

協会及び市公共図書館は増加し続け、1894年のヨーロッパ・ロシアでは一県あたり平均17館弱まで上昇した⁽⁴⁴⁾。70年のデータと比較して増加が著しいのは、ベッサラビア県の4から23、ヴラジミール県の6から21、エカチェリノスラフ県の6から18、カザン県の8から19、クールラント県の10から60、リーフランド県の16から75、モスクワ県の6から50、ペリミ県の14から50、ホルタヴァ県の7から24、ベテルブルク県の5から54、サラトフ県の6から24、スモレンスク県の9から25、ハリコフ県の6から22、ヘルソン県の10から26、ヤロスラフ県の3から21である。

一方ゼムストヴォによる人民図書館は、1894年には未だサラトフ県10館、トヴェーリ県

44 *Центральный статистический комитет Министерства Внутренних Дел. Статистика Российской Империи. XL. Сборник сведений по России 1896 г. СПб., 1897.* シベリア地方ではトムスク(1830年)、イルクーツク(1861年)に加えて、1877年ミヌシンスク、81年ヴェルフネウジンスク、86年ヤクーツク、87年ヴラジヴォストクに市公共図書館が開設された。*Куренная И.Г. Три десятилетия Читинской городской публичной библиотеки (1895–1924) // История библиотек. Вып. 1. СПб., 1996. С. 100.*

表1 各県の人民図書館数

県名	人民図書館数
ヴラジーミル	104
ヴァトカ	75
エカチェリノスラフ	16
コストロマ	60
クルスク	53
ニージニーノヴゴロド	61
ノヴゴロド	49
ペンザ	40
ペルミ	200 (1901年)
ペテルブルク	5
サラトフ	127
トヴェーリ	81
ハリコフ	294 (1902年)
チェルニゴフ	90 (1899年)
ヤロスラフ	75

4館、ヤロスラフ県7館を数えるのみだった。しかし1900年には表1の通りとなる⁽⁴⁵⁾。

このように多数の人民図書館が加わったことによって、公共図書館数は、図書館網と呼ぶうる水準に達した。この結果、19世紀末には、公共図書館は「生活上のありふれたもの」⁽⁴⁶⁾と呼ばれるに至ったのであった。

識字率の地域的差異については、次のように考えられる。ロシア帝国の識字率は、ポーランド等と国境を接する西部諸県や、国有地農民、自由農民、分離派教徒が多い北部で、16-17世紀から読書、出版活動が行われたのに対して、農奴制地域の中央黒土地帯、南部は識字率が低かった⁽⁴⁷⁾。1893年にルバーキンがブロックハウス・エフロン百科事典の「識字」の項で示した地域別識字率でも、沿バルト、両首都、中央工業地帯の諸県が高く、小ロシアで低いと指摘されている⁽⁴⁸⁾。た

だしこうした差違は、識字率の平均値を左右するほど住民の圧倒的多数を占める農民の数値であり、都市住民の識字率には大きな地域的差違は見られない。それゆえ、図書館利用に識字率の地域的差違による影響が生じるのは、農民読者が増大する人民図書館以降であると考えられる。

このように帝国内の広範囲に及んだ公共図書館であったが、それが作り出したのはあくまでもロシア語の情報空間であった。オデッサ、キシニョフ、シムビルスクをはじめとする複数の図書館では、フランス語、ドイツ語、英語、イタリア語、ラテン語、ギリシア語、トルコ語、ヘブライ語等の書籍も所蔵していたが、「外国語書籍は学問研究をしている人のみ」⁽⁴⁹⁾が読むものであった。民族言語については、教育水準向上を図って1871年に公共図書館が設置されたチュヴァシでは、チュヴァシ語の書籍はほとんど所蔵されなかったし、ヴィリノ

45 *Матвеев*. Земские народные библиотеки. С. 25 より作成。

46 *Русская школа*. 1897. № 7-8. С. 343.

47 *Мадан И.К.* История молдавской книги. Кишинев, 1982; *Книжное дело в Молдове в XVII - начала XX в.* // Развитие книжного дела, библиотечно-библиографической деятельности в Молдове. Кишинев, 1991. С. 3-46; *Рейтблат*. От Бовы к Бальмонту. С. 167-168; *Копанев А.И.* Волостные крестьянские библиотеки XVI-XVII вв. // *Русские библиотеки и их читатель*. Л., 1983. С. 59-70; *Антюхин Г.В.* Печатное слово России: История журналистики Черноземного центра страны XIX века. Воронеж, 1993; *Станько А.И.* Пресса южного региона России (XIX в.). Краснодар, 1998.

48 *Рубакин Н.* Грамотность // *Энциклопедический словарь*. Т. 18. СПб.: Ф.А. Брокгауз, И.А. Ефрон, 1893. С. 547-548.

49 РГИА, ф. 733, оп. 10, д. 103, л. 75.

教育管区では、リトアニア系住民による反政府的書籍流布の防止策としてロシア語書籍を普及させるために人民図書館建設が奨励された⁽⁵⁰⁾。つまり公共図書館は、複数言語の情報を多角的に提供する場ではなかった。1899年にヴァトカ県でタタール系住民がタタール語書籍の人民図書館を開設するよう請願したのは、従来の公共図書館があくまでもロシア語中心であり、タタール語専門館を別置せざるをえなかった状況を反映していると言えよう⁽⁵¹⁾。

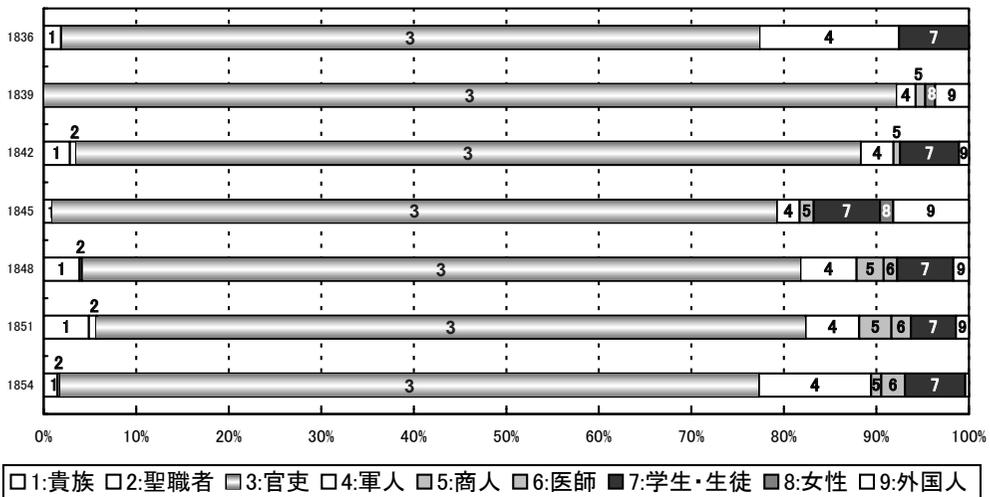
2. 利用者の身分層

では、図書館の年次報告書掲載の利用者の身分、職業のデータをもとに、図書館普及の三段階において、読者層がいかなる変化を遂げたのかを分析する。

まず第一段階の県公共図書館時代、ベッサラビア県キシニョフ図書館の利用者の身分・職業構成比をグラフにすると、図1のようになる⁽⁵²⁾。

ロシア帝国では1832年、「貴族（地主貴族、勤務貴族）、聖職者（白色〔教区聖職者〕、黒色〔修道士〕）、都市民（商人、町人、職人）、農民（国有地農民、領主農民〔農奴〕、御料地農民）」からなる四身分制が法律で定められており、ここではそれに概ね合致する形で「貴族（＝地主貴族）、聖職者、官吏（＝主に文官である勤務貴族）、軍人（＝主に武官である勤

図1 キシニョフ図書館 利用者うちわけ



50 Балков И.В. Библиотечное дело в дореволюционной Чувашии // История библиотек. Вып. 2. СПб., 1999. С. 34; Русская школа. 1895. № 10. С. 200.

51 Русская школа. 1899. № 12. С. 285. Казаньのタタール系住民向け図書館は、1906年に開設に至った。

52 1836-54年の利用者（閲覧者）数は、106、191、282、863、824、861、1013と推移する。Ганенко П.Т. История Кишиневской публичной библиотеки (1830-1917 гг.). Кишинев, 1966. С. 48より作成。

図2 ヴャトカ図書館
(1848-53年；年平均671人)

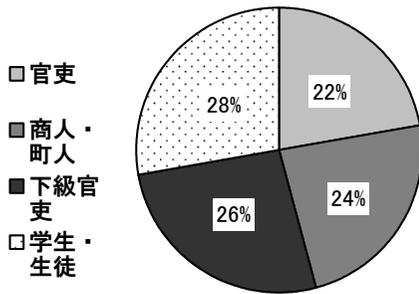
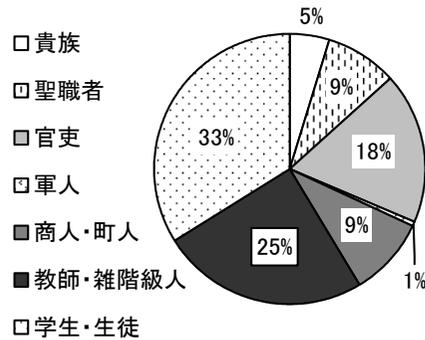


図3 カラムジン図書館
(1848-51年；年平均393人)



務貴族)、商人」と、若年層の「学生・生徒」、いずれの範疇にも含まれない少数の「医師」、「女性」、「外国人」の各項目に分類、集計されている。キシニョフ図書館では1830年代から50年代前半まで20年余りを通じて、官吏の利用者が圧倒的に多かったことがわかる。ヴャトカ県サラプーリ図書館の1842-1852年における利用者(貸出者)の身分・職業構成比でも、利用者のべ263人中、官吏は146人(55%)を占め、聖職者(40人)と合わせると、一定の教養を持つ層が全体の7割に達した⁽⁵³⁾。年間利用者140人中125人を官吏が占めるヘルソン県ケルチ図書館(1848年)、36人中32人を占めるミンスク県ミンスク図書館(1848年)、24人中17人のヴォログダ県ウスチ=スイソルク図書館(1851年)でも同様の傾向が確認できる⁽⁵⁴⁾。

この時期に官吏に次いで多いのは、商人及び町人からなる都市民である。ヴャトカ県ヴャトカ図書館の1848-1853年の利用者(閲覧者)(図2)中では、商人・町人は官吏(22%)とほぼ同率の24%を占めた⁽⁵⁵⁾。シムビルスク県カラムジン名称シムビルスク図書館の1848-1851年の利用者(閲覧者)数(図3)においても、貴族、聖職者、官吏が3割を占める一方で、商人・町人も1割に達している⁽⁵⁶⁾。また図3では、商人、町人以外に、教師や雑階級人という、四身分制に分類できない新たな都市住民が現れていることが大きな特徴である。

1860年代に始まる改革の時代以降、都市化、工業化が本格的に進行し、都市住民は飛躍的に増加した。こうした社会状況を反映して、第二段階の協会・市公共図書館においては、中心的読者層が大きく変化する。次図に挙げるカラムジン図書館の1869-1895年(図4)、ハリコフ図書館の1890-1901年の利用者データ(図5)では、身分と職業が混在する形で利

53 РГИА, ф. 733, оп. 8, д. 124, л. 19, 32об.-33, 52об.-53; оп. 9, д. 156, л. 11об.-12; д. 309, л. 11об.-12; д. 565, л. 135-135об.; д. 692, л. 68; д. 830, л. 93; оп. 10, д. 10, л. 72; д. 103, л. 100об.; д. 250, л. 72об.; оп. 11, д. 128, л. 62об.; д. 306, л. 2об.

54 РГИА, ф. 733, оп. 9, д. 565, л. 60об., л. 167 об.; оп. 10, д. 10, л. 48.

55 РГИА, ф. 733, оп. 9, д. 565, л. 10об.-11; д. 692, л. 56об.; д. 830, л. 81; оп. 10, д. 10, л. 62; д. 103, л. 54; д. 250, л. 49об. より作成。

56 РГИА, ф. 733, оп. 9, д. 565, л. 80; д. 692, л. 87; д. 830, л. 101; оп. 10, д. 10, л. 86 より作成。

図4 カラムジン図書館 利用者身分うちわけ (1869-90)

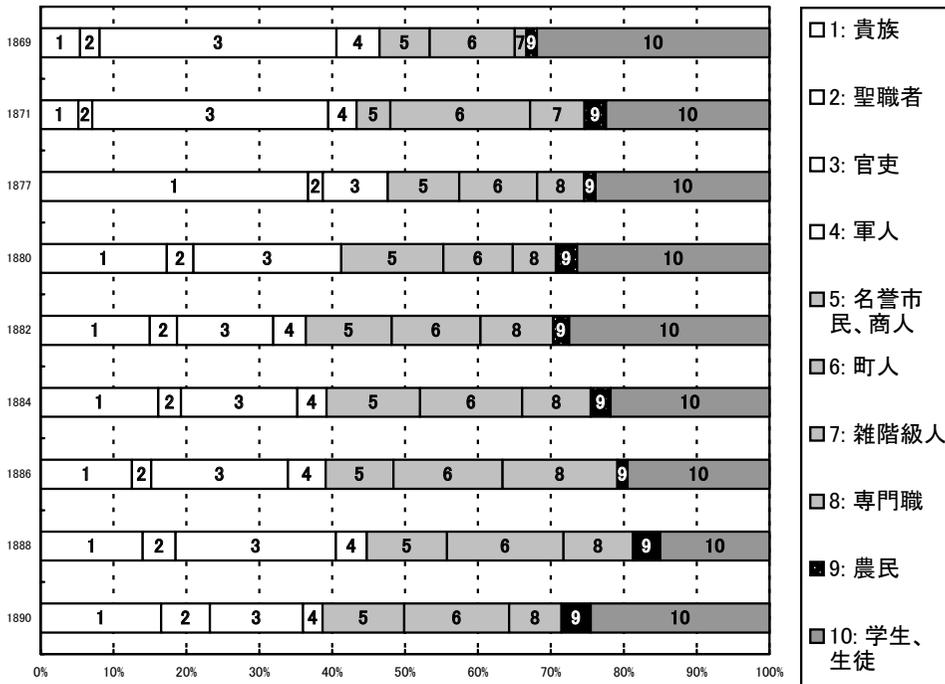
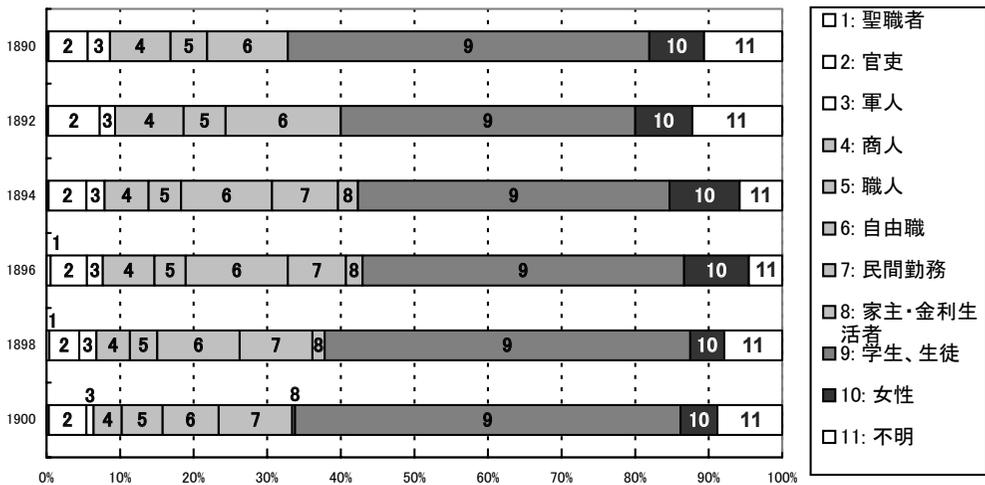


図5 ハリコフ図書館 利用者身分うちわけ (1890-1900)

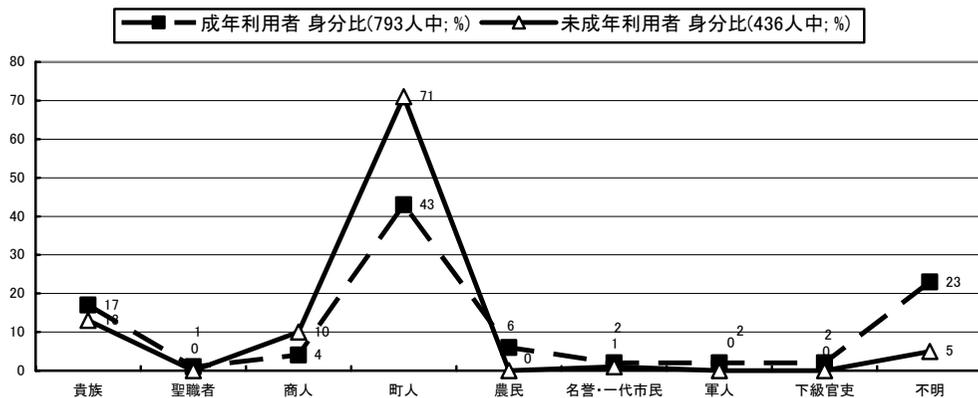


用者層が集計されている。

カラムジン図書館のデータからは、貴族、聖職者、官吏という旧読者層が70年代から90年代まで4割前後を保ち続ける一方で、四身分制内の都市民（商人・町人）と新たな都市生活者から構成される新読者がほぼ同率を占めるようになった様子が確認できる⁽⁵⁷⁾。そして、少し時代が下ったハリコフ図書館においては、90年代を通じて、新読者が旧読者の比率を上回っていったことがわかる⁽⁵⁸⁾。これを整理するならば、商人、町人という従来の四身分制における都市身分に加えて、弁護士、医師、准医師、教師といった都市の専門職及び、民間勤務者のような企業関係者からなる新しい都市住民が、その比率を大きく増したとすることができる。

ただし、ハリコフ図書館のデータで旧読者、新読者よりも比率が高いのは学生・生徒である。通常、図書館の年次報告書では、学生・生徒ら子供たちの所属身分は記録されておらず、彼らの出身階層は推測するしかない。だが唯一の例外がヘルソン県ヘルソン図書館の年次報告書であり、そこに収録された成年男女と未成年男女それぞれの所属身分をグラフ化すれば図6となる⁽⁵⁹⁾。ここでは最高率の町人、第二位の貴族をはじめ、成年者と未成年者の身分比がほぼ同一傾向を示している。一図書館のデータのみから断じるのは難しいが、図書館利用者中の未成年者の身分構成比は、概ね成年者と比例すると推定できよう。

図6 ヘルソン図書館 成年・未成年利用者身分比（1895年）



57 1869–95年の利用者（貸出、閲覧者）数は順に、940、1262、1082、851、701、550、400、375。РГИА, ф. 776, оп. 11, д. 19, л. 15; Отчет о состоянии Карамзинской библиотеки за 1869 год. Симбирск, 1870; Годовой отчет по Карамзинской библиотеки. Симбирск, 1876–1895より作成。専門職のうちわけは、弁護士、医師、准医師、教師、俳優。

58 1890–1900年の利用者（閲覧者）数は順に、2839、3452、2904、2135、3476、4696。Отчет Харьковской общественной библиотеки за 1890–1900. Харьков, 1891–1901より作成。「自由職」の具体的な職業名はここでは明示されていないが、ヴォログダ人民図書館の報告中の同一項目では「音楽家、画家」と注記されている。Русская школа. 1899. № 5–6. С. 391.

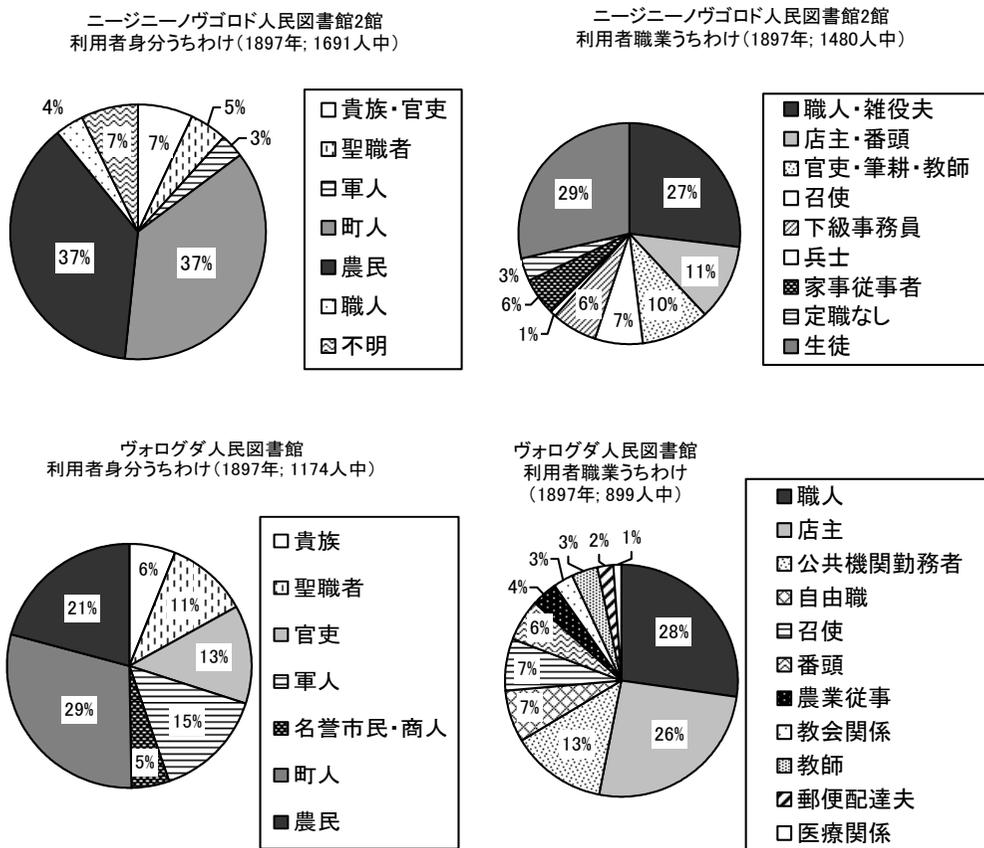
59 Отчет дирекции Херсонской общественной библиотеки за 1895 г. Херсон, 1896. С. 12.

このように協会、市公共図書館時代に、読者は四身分制内の都市民（商人・町人）と新たな都市生活者に拡大したが、農民、労働者の利用はいまだ非常に少なかった。だが1890年代後半以降、民衆啓蒙を目的とした人民図書館設立により、読者層の構成は再び大きく変化する。

次に挙げるのは、ニジェゴロド県ニージニーノヴゴロドの二つの人民図書館と、ヴォログダ県ヴォログダの人民図書館のデータである（図7）⁶⁰。ここからは町人、農民という下層身分出身者が圧倒的多数を占めたことがわかる。職業も、職人、雑役夫、下級事務員、召使など社会下層に属するものが主である。この他、ペンザ県ペンザ人民図書館利用者では町人は769人、農民は447人に達し、他身分の合計407人を上回った⁶¹。

人民図書館は従来の公共図書館と異なり、都市ばかりでなく農村にも積極的に開設された。

図7 人民図書館利用者の身分、職業



60 Русская школа. 1898. № 7-8. С. 288; 1899. № 5-6. С. 391 より作成。

61 Русская школа. 1897. № 4. С. 221.

都市と農村の人民図書館の利用者の差違については、自由経済協会がヴァトカ県ウルジュムスク郡を例に比較検討している⁽⁶²⁾。すなわち都市部ウルジュムスクでは1896年の利用者4416人中、町人が1124人、農民が598人だったのに対して、農村にある5館では利用者1492人中30人を除いて全てが農民だったという。したがって農村に開館された人民図書館は、農民読者の登場に決定的な役割を果たしたと言える。

以上のように、図書館利用者の身分階層は、1830–50年代前半の県公共図書館時代における貴族、聖職者から、60–90年代前半にかけて、協会及び市公共図書館で、四身分制内の都市民と新たな都市生活者が構成する読者に広がり、90年代に本格化する人民図書館設置によって町人、農民ら、都市と農村の下層民へと拡大した。

3. 利用者の読書傾向

次に、図書館報告書が記録する利用者の読書傾向の変化から、そこで形成された読者集団の特質について分析する。

まず、当局がどのような蔵書構成を意図したかについて触れよう。1835年に教育大臣ウヴァーロフによって選定され、33県の公共図書館に送られた255タイトル633巻の良書一式は、①宗教・道徳②自然科学③技術・農業④地理⑤法令集⑥歴史の書籍からなり、文学作品や哲学、政治経済等の社会科学は含まれなかった。これらは主に1760–1790年代の出版物であり、同時代の書籍は50タイトル255巻にとどまった⁽⁶³⁾。人民図書館も、内務省が1890年に制定した「無料大衆図書室とその監督手続きに関する規則」によって、所蔵は「宗教的・道徳的、愛国的、教訓的内容」の書物のみに制限された⁽⁶⁴⁾。また、1835–40年に345タイトル592巻の不適切とされた書籍が公共図書館から排除されたのをはじめ、蔵書の没収が断続的に続けられた⁽⁶⁵⁾。さらに、教育省、内務省、財務省などが自省の機関誌を公共図書館に寄贈し続けた。当局は図書館で、道徳性及び体制への従順さを涵養するための穏健な書物の提供を意図したと言えよう。

こうした環境下で、図書館利用者の間では全階層的に文学作品と定期刊行物が人気を博し、歴史、地理、自然科学などの学術本を大きく引き離した。第一段階の県公共図書館時代、1848年のキシニョフでは利用冊数のべ2,144のうち、文学作品は705冊(32.3%)、定期刊行物は904冊(42.2%)に及んだ⁽⁶⁶⁾。第二段階においても、ハリコフ協会図書館、イルクー

62 Русская школа. 1897. № 9–10. С. 388–389.

63 一方、19世紀前半ロシア最大の出版家 А.Ф. Смирдин は図書館発展を願って、1835年に推奨蔵書セットの割引販売を教育省に申請して許可され、543タイトル1143巻からなる5千ルーブリ相当の書籍を1500ルーブリで各地の県公共図書館に販売した。これは1830年代に出された国内外の文学作品が三分之一を占め、残りは自然科学、天文学、地理、政治経済、歴史等の書籍から構成されていた。РГИА, ф. 733, оп. 7, д. 106, л. 1; *Абрамов К.И.* Городские публичные библиотеки России. С. 25–26, 38.

64 ПСЗ. 1867. № 44841; 高田「ロシア農民とリテラシイ」64頁; *Рейтблат.* От Бовы к Бальмонту. С. 174.

65 *Абрамов К.И.* Городские публичные библиотеки России. С. 27.

66 РГИА, ф. 733, оп. 9, д. 692, л. 108.

表2 公共図書館における身分・職業別利用書籍ジャンル

	ハリコフ協会図書館 (1890-91年)	イルクーツク市公共図書館 (1890年)	モスクワ市公共図書館 (1887年)
貴族	—	①文学 ②定期刊行物	—
聖職者	①歴史 ②地理・旅行 ③教育	①定期刊行物 ②文学	①文学 ②歴史 ③定期刊行物
官吏	①文学 ②法律 ③歴史	①定期刊行物 ②文学 ③哲学	①文学 ②定期刊行物 ③自然科学
軍人	①文学 ②技術・農業	①文学 ②数学 ③自然科学	①定期刊行物 ②文学 ③自然科学
商人・名誉市民	①文学 ②定期刊行物	①文学 ②定期刊行物	①文学 ②定期刊行物 ③歴史
自由職	①文学 ②定期刊行物 ③教育	①文学 ②定期刊行物 ③哲学	①定期刊行物 ②文学 ③自然科学
民間勤務者	—	—	①文学 ②定期刊行物 ③歴史
教師	—	①定期刊行物 ②文学 ③歴史	①定期刊行物 ②文学 ③教育・言語
町人・職人・農民	①文学 ②法学 ③技術	①文学 ②定期刊行物	①文学 ②定期刊行物 ③児童書
工場労働者・召使	—	—	①文学 ②定期刊行物 ③宗教
学生	①医学 ②文学 ③法 律・政治	—	①定期刊行物 ②文学 ③自然科学
生徒	①文学 ②歴史 ③宗 教・哲学	①文学 ②定期刊行物 ③歴史	①児童書 ②文学 ③定期刊行物
不定職	—	—	①文学 ②定期刊行物 ③児童書
女性	①文学 ②定期刊行物	①文学 ②歴史 ③地理	①定期刊行物②文学③児童書

ツク市公共図書館、モスクワ市公共図書館における、身分・職業別ごとの利用書籍ジャンルを一覧にした次表から、文学と定期刊行物の人気を確認できる(表2)⁽⁶⁷⁾。第三段階の人民図書館も傾向は同じで、1896年、ペンザでは年間貸出31,836冊中9,641冊(30.3%)が文学、17,438冊(54.8%)が定期刊行物、ニージニーノヴゴロドでは25,487冊中17,557冊(68.9%)が文学、5,895冊(23.1%)が定期刊行物、ロストフ・ナ・ダヌーでは14,983冊中7,025冊(46.9%)を文学、2,670冊(17.8%)を定期刊行物が占めた⁽⁶⁸⁾。

このように、文学本、定期刊行物人気という利用者の嗜好は三時代を通じて変化がなかったものの、改革期以降、図書館運営者たちはその中に、「軽い」読書と「真面目な」読書の二つの読書傾向を見出すようになる。たとえば1876年、ジトーミル公共図書館は、「(利用者は)単なる好奇心の充足を求め、軽い本、主に文学の中に満足を見出す」(傍点——巽)と記した。1880年、オデッサ市公共図書館では司書М.Ф.デリバスは「軽い内容の本とピラ」と、「より真面目な内容の本と学術雑誌」を対置し⁽⁶⁹⁾、1898年にはヘルソン協会図

67 Отчет Харьковской общественной библиотеки за 1890-1891. Харьков, 1891. С. 16-17; *Политрук*. История библиотечного дела. С. 150-151; Отчет о деятельности городской бесплатной читальни, учрежденной В.А. Морозовой в память И.С. Тургенева за 1887 год. М., 1889. С. 21-29.

68 Русская школа. 1897. № 4. С. 222-224.

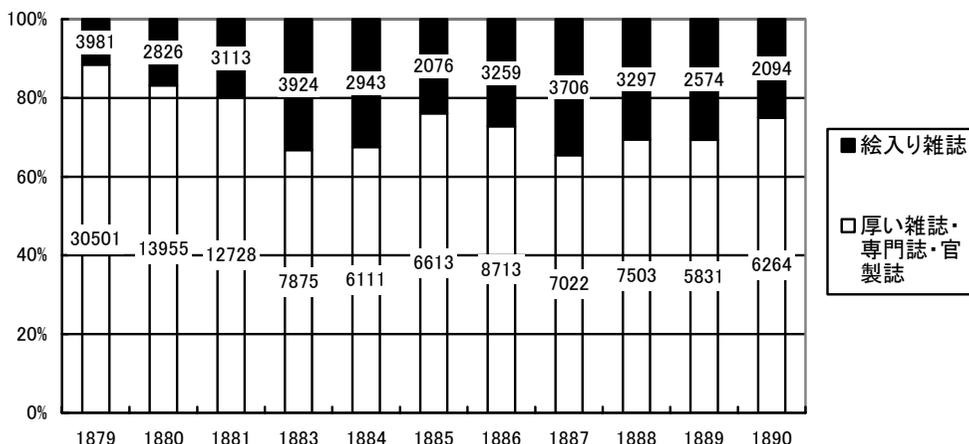
69 *Де-Рибас М.Ф.* Краткий исторический обзор деятельности Одесской городской публичной библиотеки; Речь, читанная 15-го апреля 1880 года, по случаю исполнившегося 50-летия существования Библиотеки (1830-1880). Одесса, 1880. С. 12.

書館が、利用された蔵書を「軽い読書用」と「学術的内容」の二者に分類して集計した⁽⁷⁰⁾。そしてモスクワ市公共図書館は、「小説」と「絵入り雑誌」を「休息と娯楽を求める」軽いものとして、「学術的書籍」と「厚い雑誌」という真面目な読み物と区別した⁽⁷¹⁾。

こうした区分が生じた背景には、冒頭で述べたとおり、改革期以降に民間出版社によって、文学作品の廉価版、通俗小説、絵入り雑誌などの新しい平易な出版メディアがさかんに発行されるようになったことがあった。そして図書館はこの動向に応じて「できるだけ多くの真面目な本を入れるという以前の制度を大きく変え、…新聞や雑誌、絵入りや風刺出版物を購読し、貸し出し始め」⁽⁷²⁾、『ヨーロッパ報知』『ロシアの思想』のような「真面目な」厚い雑誌と並び、『ニーヴァ』『絵画時評(Живописное обозрение)』『心のもった言葉(Задушевное слово)』などの絵入り雑誌も、人気の高いものは複数部購入した⁽⁷³⁾。公共図書館は書物の流通機構として、「軽い読書」メディアの安定的利用を可能にしたのだった。

こうして「軽い読書」を行う環境が整った図書館では、80年代を通じてその利用が定着していった。単行本よりも詳細な利用記録が残されている定期刊行物を例にとれば、「軽い読書」にあたる絵入り雑誌の請求数と、それ以外の「真面目な読書」にあたる定期刊行物(厚い雑誌、専門誌、官製誌)の請求数の比率は、シムビルスクのカラムジン図書館では1880年代を通じて図8のような変化をたどる⁽⁷⁴⁾。

図8 シムビルスク・カラムジン図書館における絵入り雑誌の請求比の推移



70 Рудченка И. Десять лет Житомирской русской публичной библиотеки 1866–1876. Житомир, 1876. С. 48; Краткий исторический обзор 25-летней деятельности Херсонской общественной библиотеки (1872–1897 г.) и отчет библиотеки за 1897 год. Херсон, 1898. С. 33.

71 Чупров А. Городская бесплатная читальня в Москве за 1886 год. М., 2006.

72 Де-Рибас М.Ф. Краткий исторический обзор. С. 10.

73 Отчет Харьковской общественной библиотеки за 1888 г. Харьков, 1889. С. 7–9; Краткий исторический обзор Херсонской библиотеки. С. 27.

74 Отчет Карамзинской библиотеки. 1879. С. 6–7; 1880. С. 6; 1881. С. 4; 1883. С. 4; 1884. С. 4–5; 1885. С. 4; 1886. С. 3; 1887. С. 4–5; 1888. С. 5; 1889. С. 5; 1890. С. 5.

他に、ニージニーノヴゴロド市図書館では1882年、厚い雑誌の利用が8,776部(74.40%)であったのに対して、絵入り雑誌が3,020(25.60%)を占め、サラトフでは1889年、厚い雑誌11,339部(70.56%)、絵入り雑誌4,730部(29.44%)、1890年にはそれぞれ9,077部(69.50%)、3,984部(30.50%)であった⁷⁵⁾。これらのデータからは、「軽い読書」のメディアである絵入り雑誌の請求が1880年代に漸増し、図書館によって1-3割という幅はあるものの、定期刊行物の全請求数のうちに安定的に一定の割合を占めるようになった様子が確認できる。

「真面目な読書」「軽い読書」と読者の社会階層は、必ずしも直接対応するものではなかった。モスクワ市公共図書館のデータから、厚い雑誌と絵入り雑誌を指標にして図示すると表3のようになる⁷⁶⁾。ここからはまず、専ら厚い雑誌を好む層(教師、自由職、学生、女性)が確認できるが、これはレイトブラトの定義する「教養読者」にあたりと考えられる。しかし彼らの間でも、絵入り雑誌は若干利用されている。そして「半教養読者」に対応すると考えられるそれ以外の読者の間には、厚い雑誌を絵入り雑誌より好む人々、厚い雑誌と絵入り雑誌をほぼ等しく用いる人々、そして絵入り雑誌を厚い雑誌よりも好む層が存在していることがわかる。つまり、専ら「真面目な読書」に従事する層から両メディアを併用する層、そして主に「軽い読書」を好む層まで、段階的な読書嗜好を示す読者群が編成されていたと行うことができよう。改革後ロシア社会では、前章で確認したような新しい社会階層からの読者が現れると共に、読書傾向としても「軽い読書」という新たなスタイルが成立し、改革前において特権的教養階級が行っていた読書と混交して、段階的な読書嗜好が形成されていたことがわかる。すなわち読者集団は、教養ある者と半教養である者が分離していたのではなく、新たな読者を内包する形で統合、再編されたのであった。

「軽い読書」によって読書という行為に参入した人々は、必ずしも娯楽を求めていたわけではなかった。絵入り雑誌の読者の具体像は、代表誌『ニーヴァ (Нива)』が次のような姿を伝えている。ある若い医師が、一家の領地に住む祖母のもとに休暇に行ったが、そこは町から40露里も離れて図書館もクラブもなく、きわめて退屈な土地だった。ある日、医師は

表3 モスクワ市公共図書館における雑誌の身分別利用状況

	厚い雑誌	絵入り雑誌
官吏 (2,185 冊)	18.35%	11.26%
聖職者 (31 冊)	16.10%	6.45%
軍人 (944 冊)	27.75%	14.94%
教師 (1,175 冊)	42.55%	5.02%
自由職 (5,972 冊)	34.50%	7.15%
商人・企業家 (2,898 冊)	21.46%	14.67%
民間企業勤務者 (13,293 冊)	16.08%	15.58%
職人 (10,338 冊)	4.65%	20.28%
工場労働者・召使 (1,759 冊)	3.30%	17.68%
不定職 (7,197 冊)	13.51%	14.54%
学生 (10,776 冊)	49.91%	2.53%
生徒 (36,603 冊)	7.14%	8.76%
女性 (3,144 冊)	32.00%	6.71%

75 Отчет Нижегородской городской библиотеки за время ее существования (1861–1882). Нижний Новгород, 1883. С. 19–20; Отчет о состоянии Саратовской городской публичной библиотеки в 1889 г. Саратов, 1890. С. 10; Отчет о состоянии Саратовской городской публичной библиотеки в 1890 г. Саратов, 1891. С. 12.

76 Отчет о деятельности городской бесплатной читальни. С. 21–29.

隣あった領地の主人の叔父にあたる、注目すべき人物に出会う。彼はトルコ出兵に従軍した将校だったが重傷を負って帰還し、それ以来生家に寄食していたのだが、世界情勢から学術、産業、地理、芸術に至るまで何でも知っており、子供たちが彼を「生きる百科事典」と思うほどだった。医師は本もない田舎での叔父の博識ぶりを不思議に思い、尋ねてみた。すると叔父は医師を自分の寝室に案内し、書棚の『ニーヴァ』25年分を見せたのであった⁽⁷⁷⁾。また、同時代人による読書経験の回想記には、次のような記述がある。「(父が子供たちのために『世界一周(Вокруг света)』を購読してくれたとき——巽)私はまだ雑誌を批判することや、雑誌に不備がありえるということを知らなかった。私だけでなく兄も、毎号、最初の行から最終ページの末尾の編集者の署名まで読んだ。」⁽⁷⁸⁾このように、絵入り雑誌によって軽い読書をする人々は、教養は持たない一方で、知識欲に富み、積極的に情報を摂取しようとする人々だったことがうかがえる。

こうした読者に、図書館の司書たちはしばしば否定的な評価を下した。たとえばハリコフ公共図書館の年次報告書は、下層民向けに開設した割引利用コースに都市の「富裕だが無教養な」人々がやってくる実態を批判し、いささかの呆れを込めてこう述べた。「二人の女性がやって来て、『トンボ(Стрекоза)』を請求した。我々のところにはそのような雑誌はない。当直司書は彼女らに、返却されたばかりの『アンナ・カレーニナ』を奨めた。「どんな本ですか。おもしろいのですか。」彼女たちはこれまで、『アンナ・カレーニナ』ばかりかJ.トルストイの存在さえ聞いたことがないことがわかった。彼女たちは大変よい身なりで、そんなに無知だとは想像しがたかった。」⁽⁷⁹⁾また、モスクワ人民図書館では、「28-38歳の中年(の読者)は、二つのカテゴリーにわけられる。ただ読むだけの読者と、光を探す読者である。前者は主に『トルコ戦争』や『ニーヴァ』を請求する。後者は…ドストエフスキーとトルストイのところで立ち止まる。」⁽⁸⁰⁾というように、絵入り雑誌読者に低い評価を与えた。そしてオデッサ公共図書館では司書M.Ф.デ=リバスが「真面目な読書」への回帰を強く主張し、通俗小説を蔵書から排除し、雑誌最新号の提供を中止し、文学作品等、他の軽い読書用の書籍は司書の裁量のもとで利用させた⁽⁸¹⁾。ここには、司書という従来型の教養読者層に属する人々の、彼らから見て未成熟である新興読者への苛立ちを見出すことができるだろう。

77 『ニーヴァ』はA.Ф.マルクスが1869年に創刊した、革命前ロシア最大の絵入り雑誌。マルクスはドイツ出身であり、英仏独の絵入り雑誌をモデルに、ロシアに初めてこのタイプのメディアを導入した。Рагозина З. Семейный журнал // Нива. 1904. № 50. С. 1016.

78 Мариак С.Я. В начале жизни // Книга и читатель 1900-1917. С. 115, 119. 『世界一周』はИ.Д.スイチンが1885年から発行した絵入り雑誌。

79 Десятилетие Харьковской Общественной библиотеки. С. 46. 『トンボ』はГ. Колнфериドが1875年から発行した絵入り雑誌。

80 Русская школа. 1900. № 3. С. 60.

81 Яковлев В.А. К новоселью городской публичной библиотеки в Одессе (1829-1883). Одесса, 1883. С. 21-22.

おわりに

以上から、改革後のロシア社会において、第一に、ロシア語出版メディアの読者層は次のような過程を経て拡大したとすることができる。すなわち、改革以前の県公共図書館時代においては、官吏、地主貴族といった特権的教養層が読者の中心であったのが、1860-70年代、ヨーロッパ・ロシア全域と中央アジア、シベリアの一部に普及した協会・市公共図書館時代に、旧読者と並んで、従来の身分制における商人、町人と、専門職や企業勤務者ら新しい都市市民の混合した都市生活者からなる新読者が登場し、90年代後半、農村に展開した人民図書館時代に、農民、労働者へと広がった。

第二に、読書傾向としては、改革期以降、新たに「軽い読書」というスタイルが定着した。通俗小説、絵入り雑誌など、平易な新規メディアが改革期以降に普及し、公共図書館がそれらを安定的に利用者に提供するようになったことで、この読書スタイルは80年代を通じて広まった。そこでは社会階層と出版メディアが個々に分離して対応するのではなく、旧来の教養ある読者と非特権階級から現れた新しい読者が混交して再編成され、「真面目な読書」から「軽い読書」まで、段階的な嗜好をもって分布するようになった。

改革の時代である1860年代に端緒をつけた読者層の拡大は、反動の時代とされる80年代にもその動きを止めなかった。また、90年代半ばから始まる農民、労働者読者の増大は、20世紀初頭から本格的に進展した。それゆえロシアの19世紀後半は、前代の教養層の読書と、後代の社会下層の読者の増大とに挟まれる、新興都市住民をはじめとする中間的な読者層に大きな動きが見られた時代と特徴づけることができるだろう。こうして読者の範囲が拡大すると同時に、読者集団は階層区分をこえ、旧来の教養ある読者と新しい読者が統合される形で再編された。以上が改革期以降、19世紀後半ロシア社会の出版メディア読者の拡大と再編の現象の具体的過程であった。公共図書館は、こうした読者の構造の変化を、書籍の提供によって技術的に支えると同時に、観察者として記録した機関であった。

1880年代を通じて存在感を増した、「軽い読書」によって読書に参入した読者たちは、未熟で判断力がないと、司書ら有識者からしばしば批判された。やがて1890年代には、Д.С. メレシコフスキーが論文「現代ロシア文学の衰退の原因と新しい潮流について」(1892年)の中で、こうした通俗メディアと読者たちを、ロシア文学を墮落させた一因としてとりあげるに至る⁽⁸²⁾。ここには、新興読者と従来型の教養ある読者の衝突という対立の構図が見出されるだろう。こうした「軽い読書」を好む読者をハーバーマスの説く「文化を消費する公衆」と見なし、この衝突を、メディアの商業化を受け入れた公衆と、それに反発する知識層との対立であったと考えることも可能である⁽⁸³⁾。この枠組みを受け入れるならば、欧州他国で進行した「文化を論議する公衆」から「文化を消費する公衆」への変質という図式が、ロシ

82 Мережковский Д.С. О причинах упадка и о новых течениях современной русской литературы // Стихотворение: О причинах упадка и о новых течениях современной русской литературы. СПб., 1912. С. 209-305.

83 ユルゲン・ハーバーマス(細谷貞雄、山田正行訳)『公共性の構造転換』第2版、未来社、1994年(原著1990年)、215-231頁。

アでは 19 世紀後半に見出されることになる。

しかしこの種の公衆は、市民社会の存在を前提とした概念であることにも留意すべきであろう。伝統的に国家の強い影響力のもとに置かれ、公論の発達に制約が課されてきたロシア社会では、これらの公衆は政治的権利を与えられず、自律性を欠くという歪みを持たざるをえなかったことも事実であった。

一方でこうした公衆の成立は、19 世紀ロシア社会における重要な変化でもあった。すなわち、これ以前に帝政は、少数のインテリゲンツィヤと、オーラル文化を基盤にツァーリ信仰を懐く農民らナロードの上に存立していたが、そこに、文字と知を介して影響を及ぼすべき、非インテリゲンツィヤの公衆が形成されたのである。彼らはインテリゲンツィヤに従来の文芸スタイルの変更を余儀なくさせながら、自らの存在感を増していった。こうした変動は、ロシア帝国における臣民統合の形態を変える可能性を持ったであろう。

改革期以降のロシア社会における読者層拡大の検討は、以上のようなインテリゲンツィヤとナロードの中間に成立した公衆の存在を明らかにする。近代ロシア社会の新たな構成者となった彼らの特質については、出版メディアとの関係から、今後、より詳しく論じる必要があるだろう。

*本研究は、松下国際財団研究助成を受けた。

Public Libraries in the Russian Empire: A Study on the Expansion of Readership after the Great Reforms

TATSUMI Yukiko

In Russia, the printing press began to develop rapidly during the era of the Great Reforms under the reign of Aleksandr II (1855–1881). At the same time, readership expanded, implying not only a rise in the number of readers but also a change in the readership structure.

A. I. Reitblat analyzed this changing readership structure in his *Ot Boyy k Bal'montu* (Moscow, 1991), in which he divided readers into three groups: (1) intellectual readers (scholars, students, and intelligentsia) who read voluminous academic journals and polite literature; (2) semi-intellectual readers (merchants, middle and lower class officials, servants, intellectual workers, etc.) who read illustrated journals and popular novels; and (3) village readers (peasants and migrant workers) who read religious books, educational pamphlets, and *lubki* (booklets with illustrations and short texts on wood blocks or copper plates).

His study provides important insight, particularly related to the inadequately studied Russian readership in the second half of the nineteenth century. However, his study has two shortcomings: One is that his scheme is too static to demonstrate the emergence of new readers and the accompanying change in the readership structure, and the other is that he relates each group of readers to one particular printing medium too clearly.

This paper aims to resolve these problems and further explore the readership analysis of the period after the Great Reforms. For this purpose, we will examine Russian public libraries, one of the main institutions through which books were circulated in those days. First, we will examine the history and environment of Russian public libraries. The process of the establishment of libraries in the Russian Empire comprised three phases: (1) *gubernskie publichnye biblioteki* (provincial public libraries) in the 1830s and 1840s, (2) *obshchestvennye* or *gorodskie biblioteki* (society libraries or city libraries) in the period 1860–1890, and (3) *narodnye biblioteki* (libraries for the common people) in the 1890s. Geographically, the public libraries were spread across provincial cities (*gubernskie goroda*) in the 1830s and 1840s, county towns (*uezdnye goroda*) in the period 1860–1890, and to villages in the 1890s. However, they served as information repositories only for Russian users.

Studying public libraries provides us with useful material for solving the two problems mentioned above. The first point concerns the social ranks of readers. They were recorded in the libraries' annual reports and provide us with the following concrete evidence on the process of the expansion of readership: The small group of the nobility and clergy in the 1830s and 1840s expanded to encompass merchants and townspeople in the period 1860–1890, and further to include peasants and workers in the 1890s.

Second, we examine the emergence of various readers' groups. Library reports proved that new reading practices such as "light reading" and reading popular novels and illustrated journals appeared after the era of the Great Reforms. Librarians contrasted these practices with those of "serious reading" and reading polite literature and voluminous aca-

demic journals. The reports indicated that none of the readers' groups were directly related to a particular medium; instead, readers from various social ranks gradually made a transition from serious reading to light reading.

We conclude that in the second half of the nineteenth century, reading in Russia was not limited only to the privileged classes, as is evident from the changing readership structure. Moreover, in the words of J. Habermas, we can consider the readers with new reading habits as "a culture-consuming public." Thus, it can be concluded that the expansion of readership is one of the important phenomena that occurred during the change of the social structure in nineteenth-century Russia.